

# フランス19世紀後半の「精神薄弱児」教育の展開に関する一考察

—セガン以降のピセートル院の教師ヴァレを中心にして—

星野常夫

## Etude sur le développement de l' éducation des handicapés mentaux dans la seconde moitié du XIX<sup>e</sup> siècle en France

—Propos sur Monsieur Vallée H. T., instituteur à l' hospice

Bicêtre, successeur de Monsieur Séguin, E. O. —

Hoshino Tsuneo

### I はじめに

19世紀にフランスで行われていた「精神薄弱児」<sup>1</sup>に対する教育の試みは、世界に先駆けるものであり、その後フランス国内のみならず世界の「精神薄弱児」教育に大きな影響を与え、方向性を示したといつてよいだろう。19世紀フランスにおける「精神薄弱児」教育の通史を描くという観点から、本報告者はこれまで、19世紀前半のフランスにおける状況についていくつかの報告を行ってきた。<sup>2</sup>

簡単に、その要約をすると、まず、19世紀の初頭には、ピネル、エスキロール、ペロームら主として精神医学者が「精神薄弱」という概念を明らかにする。臨床対象として、いわゆる「精神病」との区別をするのである。そして、彼らを「収容」していた施設としての救済院（女性を対象とするサルベトリエール院、男性を対象とするピセートル院）の役割が変化していく。17世紀には、主として貧者のための救済施設であったが、19世紀には病院という役割を持つようになり<sup>3</sup>、徐々に「精神病」「てんかん」「精神薄弱」などを分類し処遇治療するようになった。

このように、対象としての「精神薄弱」概

念の成立および受け入れる施設の整備、つまりソフトとハード両面の確立により初めて「精神薄弱児」教育が行われる基盤ができるのである。

そして、1840年頃からセガン Séguin, Edouard Onésimus (1812-1880) の実践が始まる。このセガンに関する研究報告は我が国でも比較的多くなされている。<sup>4</sup> 彼は、医師ではなく教師として、サルベトリエール院とピセートル院で「精神薄弱児」の教育にあたった。彼の指導は成功し広く海外にもその名は知られるところとなった。しかし、セガンは、両院での活動を途中で止め、さらに1850年にはフランスを去りアメリカに移住するのである。新天地でもセガンは「精神薄弱」児・者の教育指導で活躍した。

一方、セガン渡米後（1850年以降）のフランス国内で「精神薄弱児」教育はどのような展開があったのか我が国では研究報告は無い。しかもまだ明らかにはなっていない。しかしその数十年後、1879年になって医師ブルヌヴィル Bourneville, Désiré Magloire (1840-1909) がピセートル院に着任した。彼はセガンを高く再評価するとともに「精神薄弱児」の指導、教育制度確立など幅広い分野で活動し、現代

フランス障害児教育の基礎を築いたといわれている。なおこのブルヌヴィルについては文献資料も多くあり、次回から本報告者が報告を行う予定である。

つまり19世紀のフランスにおける「精神薄弱児」教育の通史を振り返ると、セガン渡米以降ブルヌヴィル登場までの30年間、あるいは、セガンがビセートル院を辞職した年(1843年)を起点とすれば、ほぼ37年間に関してはほとんど情報がなく「空白」のままである。通史を完成するためには、まず、この「空白の数十年」の事実関係を明らかにしなければならない。さらに、セガンの実践がフランスでは、引き継がれなかったのか、もし継承されたとするなら、どういう点がどのように引き継がれたのであろうか。これらの観点もあわせて検討する必要があるだろう。

そこで、本報告では、セガンがビセートル院、そして祖国を去ってから数十年の間フランス国内で展開された「精神薄弱児」教育に焦点をあてて検討を行う。

具体的には、その教育実践の舞台となったサルベトリエール院、ビセートル院でかわりのあった精神科医師を含めて事実経過を探る。次に、ビセートル院でセガンの後任教員となったヴァレという人物に焦点をあてる。これまでその名前だけはいくつかの文献に散見していたのだが、その人物像は全く紹介されてはこなかった。彼の経歴、さらに、ビセートル院での彼の実践の内容を検討していく。

## Ⅱ セガンのビセートル院辞職以降、ブルヌヴィル登場までのフランス「精神薄弱児」教育の展開(1843年頃から1880年頃まで)

### Ⅱ-1 セガンのビセートル院辞職

1842年11月9日にビセートル院に着任したセガンは、翌年1843年12月21日に辞職する。<sup>5</sup> 在任期間は1年1カ月余り。その間、「『精神薄弱』とてんかん」部門の医師ヴォワザン

Voisin Félix (1794-1872)のもと「精神薄弱児」の指導を行っていた。なぜこのように短期間で辞職したのか、その経緯については、ペリシエ Pelicier (1980)<sup>6</sup>に詳しい。

辞職の原因はビセートル院の管理者との軋轢がおきたためである。授業の対象児として「てんかん児」を含めるかどうかという点をめぐる両者のいさかいがあったようである。セガンは、「精神薄弱児」だけのクラスでの授業を求め、管理者側は「てんかん児」も含める方針を出した。両者の軋轢が現れているものに、後年ブルヌヴィルがビセートル院の古い記録の中から探し出したという、セガン在職当時の院長マロン Mallon<sup>7</sup>の書簡がある。

「(セガンは：本報告者の注)11日以来クラスを担当していなかった。彼は数人の白痴児のみに授業を行っている。このような事態をこれ以上ながびかせることはできない。われわれの子どもたちは彼らの身体的知的状態にふさわしい授業を受けなければならない。もし、この教師が当局によって指定された条件で彼の役割をはたすことができないなら、当局は彼の代役を用意しなければならない。」

(1843年11月2日)

「まちがいなく別の二つのクラスがあることが望ましいが、その場合には別の教師が必要となる。このことは、さらに人件費を増やすことになる。」(11月14日)

「他のすべての教師が指定された時間にそのクラスにおもむいているのに、セガン氏だけが出席していない。今日もまだ現れていない。これ以上このような不服従を認めることはできない、そこでセガン氏の手当の支給について、彼が仕事を欠席した分すべて停止することを許可されるようにあなたに願います。セガン氏は、10月中に彼のクラスに19回欠席した。」(11月30日)

これらの書簡はセガンの辞職の一カ月前のものである。題は問、純粹に教育の指導形態に関するものであるが、それが管理者の管理

的な考え方と相容れずセガンは本意ながら1843年12月21日にピセートル院を去って行く。<sup>8</sup> そして、1850年頃には、アメリカへ移住をしてしまう。<sup>9</sup>

## Ⅱ-2 ヴァレ、ピセートル院の教師に着任

セガンが去った後、ピセートル院で教師として「精神薄弱児」の指導を誰が行ったのだろうか。それは、セガンの辞職から約4カ月後の1844年3月13日に助教員 sous-maitre に就任したヴァレ Vallée, Hippolye-Tranquille (1816-1885) である。<sup>10</sup> 彼に関する詳細は次の章で取り上げる。

## Ⅱ-3 サルベトリエール院とピセートル院の医師と「精神薄弱児」教育

本報告で焦点をあてる期間に「精神薄弱児」教育がどのように展開していたのかを調べる時に、その教育を行う施設としてのサルベトリエール院およびピセートル院において、当時このことにかかわった医師たちの動向を探ることは不可欠なことであろう。というのは、19世紀フランスの「精神薄弱児」教育の歴史においては、それを推し進めていったのは、両院に所属する医師でありほとんどが精神医学者なのである。教師でそういう役割を担った者といえ、現在の評価ではセガンぐらいである。このことは、特徴的なことといえるのではない。例えば、同じフランスにおける視覚障害児教育や聴覚障害児教育の歴史をたどると医師以外にも聖職者や障害児学校の教師が重要な役割をはたしているのである。

このような大きな流れの中で、セガンはあくまで教師であり、医師ではなかった。このことは表面には出て来ないけれども、セガンがピセートル院を辞職せざるをえなかったことの一因となっているのではなかろうか。

ここで取り上げる人物は、本報告で問題とする期間に、サルベトリエール院、ピセートル院の医師として「精神薄弱児」に関する著作も著している数少ない人物、ドゥラシオーブ Delasiauve, Louis Jean François (1804-1893)

である。そして、彼とセガン、ヴァレ、ブルヌヴィルとの人間関係もあわせて検討する。

## Ⅱ-4 ドゥラシオーブの人物像

ドゥラシオーブ Delasiauve, L. J. F. は、1804年10月14日にウール (Eure) 県ガレンヌに生まれた。父親は商人であり、子どもの頃はその手伝いをしていたという。「彼は、堅固とした民主主義者としての立場から、その質素な出身を恥じることもなく、当然のことながら誇りに思っていた。」とブルヌヴィルは、書いている。

上級学校に進むための古典学習の開始は遅れたが、やがてパリに上京し、医学を学び1830年には論文が通過し、医師となる。故郷の町に近いイヴリー・ラ・バタイユという町に戻り、そこで開業する。田舎の町医者として名声を得たのだが、1839年頃パリに再びやって来る。<sup>12</sup> パリでは、「医学雑誌」la revue médicale と「実験」l'Expérience の編集に協力したり、それまでの臨床的な経験をもとにいくつかの論文を刊行した。<sup>13</sup> また同じ時期に実用学校 l'école pratique で治療法と医学関連の科目の無料の授業を受け持った。

1843年に、ピセートル院の居住医師見習い médecin résident adjoint の選抜試験があり、彼は満場一致で任命された。<sup>14</sup> ピセートル院ではルーレ Leuret の部門に配属された。その部門はルーレの死後、「てんかん」部門と「精神薄弱」部門の二つのセクションに分けられ、ドゥラシオーブは後者を受け持つことになった。ピセートル院には21年間在籍し、1854年にはサルベトリエール院に移った。サルベトリエール院には1878年まで在籍した。

サルベトリエール院では、成人の「てんかん」と「精神薄弱」を対象とする第4部門の医学監督 La direction médicale に就任する。そして、1859年には医学アカデミーで行った講演内容を刊行し「精神薄弱児」教育の必要性を訴えた。<sup>15</sup>

また、彼は政治的、社会的問題にも関心を

持ち国会議員選挙（1848-1889）と市会議員選挙（1871-1890）で活動的な行動をした。

## II-5 ドウラシオーヴとセガンとのかかわり

アメリカに移住したセガンが一時フランスに帰国しビセートル院とサルペトリエール院を訪ねている。これは、セガンが1873年ウィーン万国博覧会にアメリカ代表団教育部担当委員として出席した時のことである。サルペトリエール院を見学したときの様子が書かれているペリシエ（1890）から抜き書きする。<sup>16</sup>

サルペトリエールの白痴学校について、セガンの批評はまた厳しいものであった。「50人の生徒の半分はてんかんであり、教師ニコル嬢は彼女の献身の気持ちや再教育の方法については関心をもっていてもかかわらず、手段と激励もないために多くのことができない。」そしてセガンは医師の努力に対する行政の関心の欠落を次のように指摘している。

「ドウラシオーヴ博士は白痴の改善の方法について他の同僚の誰よりも、この立派な女性と話すことを好む。彼はこの複雑な（白痴、てんかん、精神病、教育）主題で多くの著書や注目すべき論文を書いている。しかし、確かに彼の特別な精神をかながみれば、彼の公務の廻診の時に、忍耐強くそこにいて詮索され、ただただ観察されていたことを理解するのは容易である。このことは次の時にとりわけ言えることである。話が必要な改革に及ぶと、彼は急に声の調子を変え小声になり、行政上の権力を持つ者が近づくと、私の手を押さえて『あとでお話ししましょう。』という。」セガンは「精神薄弱児」教育行政の不熱心さに憤っているのだが、行政への対応にあまり積極が見られないドウラシオーヴにもそれほど好意的なものをもってないようだ。

## II-6 ヴァレ、ドウラシオーヴ、ブルヌヴィル三人の人間関係

この3人のうち、ブルヌヴィルの詳細は次回以降の報告で取り上げる予定であるので、

ここではドウラシオーヴとヴァレとの人間関係を中心にして簡単に彼の経歴を述べる。<sup>17</sup>

ブルヌヴィルの経歴をたどって行くと、その2人との緊密な人間関係が明らかになる。

ブルヌヴィルは1840年10月21日ウール県ガランシエール Garancières で生まれた。生家はドウラシオーヴの家とは12キロメートル位離れたところにあり、両家は親交があった。

ブルヌヴィルは1859年パリに上京し、<sup>18</sup>進学についてドウラシオーヴに相談した。その結果、医師になることを決意したブルヌヴィルは、午前中はビセートル院で患者の臨床検査や死体解剖の実習を行い、午後にはバカロレア受験準備のため文学と科学を学んだ。そのためにブルヌヴィルが指導者として紹介したのはヴァレであった。また、一時期ヴァレの家に寄宿しているという。<sup>19</sup>

このような関係からして「ブルヌヴィルがセガンに関する話を聞いたのは間違いなくヴァレによるであろう」とペリシエは推測しているのだが、<sup>20</sup>かなりその可能性は強いようである。

この時点で、この3人はお互いに知り合い人間関係を築き、セガン以降の「精神薄弱児」教育の継承を絶えることなく推し進めたと言っただけであろう。そして、結果としてはセガンをブルヌヴィルが再評価することになった。

## III ヴァレの人物像と実践

### III-1 ヴァレの経歴<sup>21</sup>

ヴァレ Vallée, Hippolyte-Tranquille は、1816年3月23日に英仏海峡に面する港町シェルブールで生まれた。父親は憲兵である。ヴァレは13歳まで初等学校に通った。その後10年間シェルブールの給水関係の仕事をし、同時に地方紙「ラ・マンシュ県とシェルブール・ジャーナル Journal de de Cherbourg et département de la Manche」に寄稿をしていた。やがて、パリに上京し書店に勤めながら、

別の職を探していた。1841年11月21日、彼が25歳の時にピセートル院に「生徒監督」surveillantの身分で就職をする。セガンのピセートル院での「精神薄弱児」教育の実践(1842年11月9日から1843年12月21日までの間)を目の当たりにすることになった。そして、セガンが辞任し、数カ月後の1844年3月13日にヴァレは教師助手 commis-instituteurに任命され、1866年1月1日まで約22年間にわたり在職していた。時間的なつながりから見れば、まさにピセートル院でのセガンの後任者である。

彼は1846年よりパリ市の南に隣接しているジャンティリ Gentilly に私立の施設を開設し「軽度の精神薄弱児 arriéré」の教育を行っている。それは、ピセートル院の在職と平行して行われており、1862年には20人の子どもが在院していたという。その私立の施設は経営的にもうまくいったが、貧しい「精神薄弱児」のための施設を建設するために国と県に遺贈した。これが後にブルヌヴィルも関係したヴァレ財団の基礎となった。その後、人生の栄達もとげたようで、1865年には市長になりアカデミーの受勲者となった。また、ラルースの「19世紀世界大百科事典」補遺2版には、少ない量ながらその名が登場した。ちなみに、セガンの項目はないという。

### Ⅲ-2 ヴアレのピセートル院における教育実践

ヴァレがピセートル院でどのような教育を行っていたのであろうか。本人の著作はないようなので、彼の教育実践を見学した者の報告により検討する。

#### Ⅲ-2-1 ドゥ・ボアモンのピセートル院ヴァレ教室見学とセガンを取り巻く当時の状況

1846年に刊行された、セガンのフランス時代の代表的著作といわれる「道徳的治療、衛生、教育 Traitement moral, hygiène et éducation des idiots」を取り上げたある書評の中

にピセートル院のヴァレの教室の実態を詳細に報告しているものがあった。<sup>22</sup>

まず、この書評者について述べる。ドゥ・ボアモン Brierre de Boismont (1798-1881) という医師で、サルベトリール院ではパリゼ Parisetの弟子で、「自殺」研究でよく知られておりヌーヴ・サン・ジュヌヴィエヴ通りに健康の家 la maison de santé を経営していた。

彼が「セガンの著書の書評を担当して概念としても全体としても非常にすばらしいということがわかった。そしてこの方法の応用したものを知りたい」と思い、かつてセガンが在職していたピセートル院のヴォアザンの「精神薄弱児」部門を1847年3月に見学することになった。そして、その年の10月に発表した書評の中にその時の見学記が載っている。

この書評が発表になった1847年は、セガンがピセートル院を辞職してから4年が経過、そして書評の対象となった著作が刊行された翌年である。ペリシエらによれば、セガンの「道徳的治療、衛生、教育」の出版後は、「沈黙が取り囲んでいた」というが、ドゥ・ボアモンの文から、彼の目を通してみた当時の雰囲気伝わってくる。

彼はその書評の中で次のようなことを書いている。「セガンは医師ではないといって責められている、しかし聖ヴァンサン・ドゥ・ポール、アヴェ・ドゥ・レベという人たちは医師という仕事には就いていないことが忘れられている。正しい判断力、本当の人類愛があれば、ありきたりの服など着ていなくても善行はできるものである」(p. 85)。その時点では、孤立無援で、それから先どういふ実績を積んで行くかも知れぬ30歳半ばのセガンを支持するために、慈善的社会事業家や視覚障害児教育の創始者などの偉人たちの名を挙げている。少しおおげさな表現を使って支援しなければならないほど、セガンを無視する「空気」がその当時存在していたといつてよいだろう。セガンが医師ではないということ

が、セガンのビセートル院辞職、医学界におけるセガンの成果の無視への一因となっていると考えるのもそれほど外したものではないだろう。セガンはビセートル院を辞職しアメリカに移住するまでの7年間(1843-1850)は、「精神薄弱児教育」に関係のある世界では、教育活動をするには最悪の状況であったといえる。セガンのアメリカ移住の動機について、政治的な背景などいくつかの要因が考えられているが、直接的にはフランス「精神薄弱児」教育界からセガンを排斥しようとする動きがセガンを圧迫していたということ、そのことがかなり影響を与えていると考えられる。

### Ⅲ-2-2 ヴァレの指導の実態

#### ・児童数

ドゥ・ボアモンが教室に入っていた時には、6歳から18歳までの50人の子どもたちが半円に並んでドゥ・ボアモンと2人のアメリカ人見学者を迎えた。セガン時代は何人ぐらいの子どもがいたのだろうか。ビセートル院で開始時には90人であったといわれる。<sup>23</sup>また、セガンが1873年にビセートル院を再訪した時は、約100人であった。また、64人中、てんかん児は52人であったという記述もある。その時セガンは施設の老朽化ばかりでなく児童数の多さと教員の少なさにも遠慮なく批判していた。子どもの数については、さらに劣悪の報告もある。ペリシエによればヴァレは1人の助教師とともに150人から200人の子どもを指導していたという。<sup>24</sup>

見学記は続く。

はじめの1時間、体の運動をやっていたが、その間無秩序な動きはせず、規律を守らない行動は全くなかった。

以下、見学した子どもの活動別の一つずつ取り上げる。

#### ・最初の活動は「歌唱」であった。

3人か4人位の子ども以外は盲人の演奏によって、頌歌を抑揚正しく合唱も美しく歌っ

ていた。

#### ・「ダンス」

3人の子どもたちによって正確に演じられた。他の子どもたちはダンスを演じている子どもたちをよく見ていたようである。1人の助教員は3人の「精神薄弱児」を前に進ませ、誤りなく軍隊の訓練をやった。

#### ・「字の模写」

ヴァレがドゥ・ボアモンの前に1人の「精神薄弱児」を連れて来た。その子どもは、やぶにらみで、マヒがあり腕は変形している。声は出すことができるが、ことばは不明瞭であった。ヴァレ氏が、石板の上にドゥ・ボアモンの名前を書き、その子どもに模写させた。このタイプに特有の動きをして字を見ていたが、名前はとても読みやすく模写された。

#### ・「ドミノゲーム」

字の模写をした子どもが、アメリカ人のフィッシャー博士とドミノゲームで遊んだ。子どもはこのゲームが好きなようで自分が負けると不満な顔をし、勝つまで続けようとした。

#### ・「聞き取り」

ヴァレが、15歳くらいの「精神薄弱児」を黒板の前に連れ出した。そして、ヴァレがドゥ・ボアモンに一つの文を読ませた。それを聞き、その子どもはただちに大文字で書いたが、一カ所だけ小文字であった。ヴァレの要求に答え、少し観察して小文字を消して大文字に直した。

#### ・「体操」

2人の子どもが、棒をつかんで立ち上がり、横になるという一連の運動を繰り返した。

#### ・「顔の部分の指示」

教育を受けて間もない5人の「精神薄弱児」が一行に並び、教師が大きな声で言った顔の部分の部分を次々と指し示した。ほとんど誤りはなかった。

#### ・「形の弁別」

1843年6月以来4年間ビセートル院に在籍している15歳か16歳の「精神薄弱児」の書類

をみると入院当時は、ことがはなく、絶えず落ち着きなく動き回り、無秩序な動きをし、手の上に乗せられたものを食べているという状態であった。これが4年間で大きな変化をしたことが報告されている。手の上に置かれた厚紙製の図形の名前をすべて言えるようになった。眼帯を両目につけても同じように正しく形の弁別が可能であった。

・「嗅覚の目隠し実験」

20の小ビンに入った物質があり、栓を開け臭いをかぎわける。臭いが弱い場合には時間がかかるが、エーテルとかアンモニアのような強い場合にはすぐに名前を言うことができる。

・「算術、計算」

14歳の子どもに対し、簡単な計算をさせた。「6たす8は」という質問に対し14と答えた。「14たす6は」「23たす5」「50の半分は」「15の2倍は」「6かける6は」「6かける9は」に正しく答えた。「244かける26は」には計算式を書いて答えをだした。

ある子どもには、1から15までの白い丸と数字の対応を訓練していた。また、いくつかの丸を隠して残っている丸の数を考えさせたりもした。

硬貨を使った課題もあった。12の硬貨を子どもに示し、「同じになるように2つに分けなさい」「4分の1を取りなさい」

ドゥ・ボアモンは高度な計算能力をもっている一人の「精神薄弱児」のことを特に記述している。「64かける12は」を鉛筆ですばやく計算し、教師よりも早く答えをだしてしまうという。現在の障害の範疇でいえばある種の「自閉的な」子どもに共通する特徴といえるだろう。

活動は「ソルフージュ」で終わり、次に作業を見学した。作業の種類は3つある。

・「木工」には約10人ぐらいたいた。さまざまな授業で顔なじみになった子どもたちだった。鉋、鋸、万刀などを使い大きな板を削

り、タンスとか鏡戸を作っていた。作業場は教室に遠くない所にあり、その中は静寂が支配していた。

・「製靴」にも同じように約10人ぐらいたいた。小さな皮を縫い合わせた縫い目は、十分に間隔が狭く等間隔であった。倉庫には彼らが作った60足以上の短靴が置かれていた。

・「農作業」は、この時に見学したわけではなく、季節の良いときに多くの者がやるという説明だった。

### Ⅲ-3 セガンの指導法との関連

ドゥ・ボアモンは、ヴァレの実践を見学して、セガン現論の継続性という問題をどのように述べているだろうか。ドゥ・ボアモンが見学した時に、ヴァレもマロンも「私(ドゥ・ボアモン：報告者注)が見学する予定になっている訓練はセガンのものとは無関係であると断言していた」という。<sup>25</sup> 指導方法の多くはセガンから引き継いでいるのに、どうしてもそれを否定しようとする意志が見えるようだ。<sup>26</sup>

ドゥ・ボアモンは、「ヴァレ氏の熱意による確実な進歩を知ることができた」と書き、彼の指導を称賛している。しかし、彼は、ヴァレの指導はセガンを受け継いでいることを確信している。「セガンの著書(報告者注：この書評の対象になっている1846年の「道徳的治療、衛生、教育」)から引き出した私の結論を修正することはない」「セガン氏とその継承者のおかげで、この薄幸なものたちの知的道徳的状态を改善し、もはや牛小屋の中でうづくまることはない」と述べている。

また、この書評の末尾で「明らかな功績と比類のないオリジナリティーを持つ人間が、その成功を演じた舞台から遠ざけられているのは残念なことである」と結び、セガンの影響をあくまで否定していることへの遺憾を表している。

セガンがピセートル院を辞職する直接の原因となったのは「てんかん児」混合の問題で

あった。ドゥ・ボアモンの報告によればヴァレの教室には10人の「てんかん児」がいたという。セガンは分離して授業を行いたいという要求をもっており、それが管理者と衝突を起こしたのだが、セガンの後任ヴァレは相変わらず混合クラスで授業をしているようである。

#### Ⅳ まとめ

セガン以降の「精神薄弱児」教育史におけるいわゆる「空白の数十年」の事実関係がある程度明らかになった。

セガンがピセートル院を辞職した直後の雰囲気は、セガンにとってかなり厳しいものであったようである。セガン排斥の動きが激しく、セガンという人物そのものばかりでなくその影響をも否定している。しかし、否定してはいるもののその方法はセガン以降もヴァレによって引き続き受け継がれている。それは、その時期にピセートル院のヴァレの教室を見学したフランス人医師の書き残した報告によっても明らかである。

そして、セガン以降の「精神薄弱児」教育は、ドゥラシオーヴ、ヴァレ、ブルヌヴィルという3人の医師と教師が主要な役割を担っているのだが、この3人の間には緊密な人間関係があり、その人間関係が「精神薄弱児」教育の展開を支えているといっても言い過ぎではないだろう。

今回の報告では、ドゥラシオーヴがセガンの教育理念をどのように評価しているのかという点については、未検討のままである。セガンの教室で行われる指導方法は、継承されたようだがその理念についてはどうなのか。さらに、ブルヌヴィルのセガン再評価は、積極的にセガンを評価しているとは思われない他の2人との関係の中でどういうかかわりがあるのだろうか。次回報告の課題としたい。

#### 注

- 1) 用語問題がまだ結論の出していない段階なので本報告では括弧付「精神薄弱」とする。またフランス語文献中に idiot とか arriéré などの言葉が使用されているが、ここではすべて精神薄弱と訳し括弧を付けて用いる。もちろん、引用文の場合には何らの修正も加えておらず原文のままである。
- 2) 星野常夫・大井清吉 フランスにおける精神薄弱児の処遇の歴史に関する一考察(1) —サルベトリエール救済院の成立から、そこで精神薄弱児の指導が行われるまで—日本特殊教育学会第24回大会発表論文集 558-559 1986 a  
星野常夫 フランスにおける19世紀初頭までの精神薄弱児に処遇に関する一考察—サルベトリエール救済院の設立からペロムの「白痴論」まで—文教大学教育学部紀要第20集 34-43 1986 b  
星野常夫・大井清吉 フランスにおける精神薄弱児の処遇の歴史に関する一考察(2) —エスキロールの Idiotie 論を中心にして—日本特殊教育学会第25回大会発表論文集 178-179 1987 a  
星野常夫 フランス19世紀初頭におけるエスキロール, J. E. D. とその「白痴論」について, 文教大学教育学部紀要第21集 50-80 1987 b  
星野常夫 フランスにおける精神薄弱児の歴史に関する一考察(3) —1840年代サルベトリエール院, ピセートル院の障害者の処遇の実態について—日本特殊教育学会第27回大会発表論文集 622-623 1989 a  
星野常夫 フランス19世紀中期の収容院—イリュストラシオン紙 “L' Illustrarion” 1844年の記事を通して—文教大学言語文化研究所紀要「言語と文化」第2号 131-149 1989b
- 3) 近代的な意味の病院となるためには教会から離脱をすること, 例えば患者の世話をするのは修道者ではなくて看護婦・人であることなどの「病院の世俗化」を経過しなければならない。これは、19世紀の末ブルヌヴィルの改革まで待つことになる。

- 4) 清水寛, 津田裕次, 松矢勝宏らの研究
- 5) この着任と辞任の日付は Yves Pelicier et Guy Thuillier, Edouard Séguin (1812-1880) nouveaux documents, CDNP, 1981 p. 185による
- 6) Yves Pelicier et Guy Thuillier, Edouard Séguin (1812-1880), L' Instituteur des idiots, ECONOMICA, 1980 (翻訳, フランス障害児教育研究会編, フランス障害児の研究4 1986年9月 p.2-21)
- 7) マロンに関する詳細なことは今のところ不明だが, 文献5 p. 186にわずかながらも記述がある。それによると彼は1827年1月1日から1850年2月1日までピセートル院に在職し, また同時に「精神薄弱児」のための施設を経営していたとある。
- 8) フランスの精神医学史の入門書にも, セガンがピセートル院を辞職した経緯について同じような記述がある。「『精神薄弱児』と『てんかん児』の混合をセガンが拒んだことが院長との衝突を引き起こした。」それが原因で「党派性の犠牲者として追い出された。」  
Gérard Massé et al., Histoire illustrée de la psychiatrie Dunod, 1987, p. 36  
ここでいう「党派性」とは, 教師セガンに対しての医師集団のことを指し示していると推測される。
- 9) セガンが辞職した後の所在地は不明である。1840年には, ピガール街6番地に私立学校を開いていたことは, 確認されている。Archives de Neurologie 1895, vol. 30 p. 265に再掲載されている「セガンの私立学校に関するフェリュの報告 Rapport de Ferrus sur L' établissement privé d' Edouard Séguin」の中に, この番地が明示されている。それで, ピセートル院辞職後もこの場所で私立学校を開いたという推測も成り立つ。セガンがアメリカに移住した年号についてはいくつかの説があり確認されたわけではないが, 文献5, 6の著者をはじめ一般的には1850年としている者が多い。
- 10) ヴァレに関する年号, 日付などは, 文献5の“Hyppolye Vallée” p. 185-188による。
- 11) ドゥラシオーヴについての事実関係, 年号, 日付などは, 死後に彼のために捧げられた次の2つの追悼論文による。① Bourneville, Le docteur L. J. F. DELASIAUVE sa vie—ses œuvres, Bureaux du Progrès Médical, 1894 ② Nécrologie L. J. F. DELASIAUVE, Archives de Neurologie, 1893, vol. 25, p. 65-80
- 12) 医学心理学協会のクリスチャン Cristian 博士がドゥラシオーヴの葬式当日に朗読した追悼文によると, 彼がパリに再度上京したのは1838年となっている。文献11②p. 74
- 13) 文献11②によれば1844年までに発表した論文の数は11である。そのうちいくつかのタイトルを挙げると「水銀発散によって引き起こされた精神異常に関する法医学的診断」(1840年), 「銀硝酸の濃縮溶液による結膜炎に関する実験」(1844年)などがある。
- 14) この選抜試験とは, 1840年に「病院および救済院の総会議 le conseil général des hôpitaux et hospices」が創設したピセートル院, サルベトリエール院の定員4名の居住医師見習い募集のための試験のことである。そのうち1名の欠員が生じたために1843年10月と11月に選抜試験が行われた。ドゥラシオーヴの任命は1843年12月22日であり, 業務についたのは1844年1月11日である(文献11②p. 67)。任命の日付は, 奇しくもセガンがピセートル院を辞職した翌日である。
- 15) Des princeps qui doivent présider à l' éducation des idiot, Mémoire lu à l' académie impériale de médecine, Paris, Librairie de victor masson, 1859
- 16) 文献6 p. 169-170 (翻訳, フランス障害児教育の研究5, 1991年9月 p. 19-20)
- 17) Semelaigne R., Les Pionniers de la Psychiatrie Française, Bailliere, 1932, Tome 2, p. 241-250
- 18) Poirier, J. et al., De Bourneville à la scrérose tubéreuse, Médecine—Sciences, 1991, p. 3によれば, 1859年9月のことである。
- 19) 同上 p. 3
- 20) 文献5, p. 186
- 21) 文献5の補遺の部の中に IV. HIPPOLYTE VAL-LÉE (1816-1885) という項がある。その中にヴ

ァレとは既知のブルヌヴィル自身が彼のことを書いた文がある。それは「セーヌ県の精神病患者の監督委員会での報告 Rapport à la commission de surveillance des aliénés de la Seine (1891年)」という報告書である。以下、ヴァレについての事実関係、年号、日付はこの文献による。

- 22) 文献 5 p. 85-95 に転載されていた「ブリエール・ドゥ・ボアモンの書評 Un compte rendu de Briere de Boismont」による。このボアモンの書評は、「公衆衛生と法医学年報 Les Annales d'

hygièn publique et médecine légale」 38 卷 p. 464-478 1847年10月誌上に発表されたものである。

- 23) 津曲裕次, 19世紀初頭のフランスにおける白痴教育に関する一研究, 奈良教育大学紀要, 人文社会科学, 18 (1) 205-225 1969
- 24) 文献 5 p. 186
- 25) 文献 5 p. 91
- 26) 基本的な指導方法はセガンのものと同じである。ヴァレの時に新たに加わったのは、木工, 製靴, 農作業の3つの作業である。